

「保育」の原点 108

生まれたばかりの赤ちゃんでも、目が見える

文

葛西得男

text by Tokuo Kassai

ひ と昔前まで、生まれたばかりの赤ちゃんは何も見えず、自分では何もできない、全く無能力な存在と考えられていました。育児書にもそう書いてあり、この無能力ということも前提に、育児が考えられていたようなところもあります。

しかし、赤ちゃんは無能力どころか、生まれたときからさまざまな素晴らしい能力を持って生まれてくるのが、最近の研究によって明らかにされています。その一つに、赤ちゃんの「見る能力」を挙げることができます。

もちろん「見る」といっても、私たち大人が見るのと同じように、赤ちゃんにも見えているというわけではありません。それはもっと先の話ですが、生まれた直後の赤ちゃんでもちゃんと目が見えるのです。それが証拠に、赤ちゃんは生後わずか9分で視線を合わせる事ができるといわれています。

育児の基本は「まなかい」に

内藤寿七郎著
『育児の原理』

私は常々、「育児の基本は『まなかい』にある」と考えています。『まなかい』とは、本

来は「目の前」という意味ですが、私には「目と目が合うこと」というような意味で使っています。つまり、育児の基本は赤ちゃんの目を見ることにあるというわけです。

生まれた直後の赤ちゃんでも、優しい気持ちで見つめてくれる人には視線を合わせるのです。赤ちゃんの心にお母さんの愛を伝えてくれるのが、この『まなかい』なのです。

以前、新生児担当の女医さんと回診をしていた時、その女医さんから「ああ、くやしい」と言われたことがあります。どうしたのかとその理由を尋ねると、「内藤先生が診察なさると、どの赤ちゃんも、みんなおとなしくなるんですもの」と言うのです。

自慢するわけではありませんが、私は「泣く子も黙る内藤」といわれています。別にタネもシカケもありません。私はいつも無心で赤ちゃんを抱いて、目で話しかけるように努めているだけです。これが「うるさいから、泣きやませよう」とか「なついてくれるかな」とか、ちよつとでも考えると、やはり邪心が入るのでしよう。赤ちゃんは素直に受けつけてくれません。やはり大切なのは、こちらの気持ちとそれを伝

えるまなざしだと思います。まだ言葉がよく分からない赤ちゃんでも、目と目で対話ができるわけですが、この目による「心の対話」は赤ちゃんの健康な心身を育てるために、大変重要なことなのです。

優しい気持ちで赤ちゃんを抱き、赤ちゃんを見つめてあげればいいのです。それだけで愛情が伝わり、赤ちゃんの心は安定するので。こうした目で伝える愛情は、いくら赤ちゃんに振り注いでも、与え過ぎになることはありません。

『育児の原理』より

Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。
1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。
1975年に帰国後、アプリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人 松福会 理事長に就任。
松福会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アプリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。
アプリカ葛西 副社長時代に国連環境計画 (UNEP) のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いなからその人脈などを広げ現在に至る。

